



Caritas Kaleidoscope

カリタス女子短期大学

英語・英語圏文化専攻

Vol. 6

British Hills in 2002

英語・英語圏文化専攻 教員

北川宣子、前田隆子



英語・英語圏文化専攻の1年生は、毎年6月上旬に福島県の羽鳥湖のそばにあるブリティッシュ・ヒルズ(以下B.H.)を利用して異文化体験学習を行います。昨年とは打って変わって晴天に恵まれた今年は、6月6日~7日の1泊2日で「英語生活」を送ってきました。

B.H.に到着し、オリエンテーションを受けた後、グループに分かれて、Cooking(スコーン作り)、Aromatherapy(いろいろなエッセンシャルオイルやハーブの基本的な効用を学びながらのバスソルト作り)、3-D Card(3次元の絵のように浮き上がった紙細工のテクニックを学ぶ)

の英語の授業を受けました。また、フランシス・マッカーシー先生とパトリシア保田先生によるスコットランド民謡やダンス、英語の歌の授業も好評でした。

夜には、テーブルマナーについて英語で講義を受けた後、正装して英国式フォーマルディナーをフルコースでいただきました。皆、最初のうちは緊張した面持ちでテーブルに着きましたが、徐々にその場の雰囲気にも慣れ、食事を楽しんだ様子でした。食後には、スコットランド出身の講師による Scottish Dance 教室が開かれ、約40人の学生たちが gym でスコットランドの音楽に合わせて、様々なダンスに挑戦しました。思っていたよりも体力の要るダンスで、踊り終わったあとにはヘトヘトになりましたが、皆笑顔で一杯でした。

その後消灯までは、パブでサッカーワールドカップの応援をしたり、スヌーカー(英国式ビリヤード)を楽しんだり、部屋で友人と語り合ったり、と思いに過ごしたようです。

翌日は、各自講義を受けたあと、有志は羽鳥湖のそばの見晴らしのよい場所に行ったりし、その後昼食を取り、皆名残惜しそうにB.H.を去りました。

帰ってからのアンケート調査によると、約90%の学生が今回のプログラムに満足しており、もう1泊長く宿泊したかったという声が多数を占めました。ここで学生たちの言葉でこの2日間の体験を振り返ってみましょう。

日本なのに海外に行ったような体験ができてすごく楽しかった。

友だち同士でも積極的に英語を使って話すことができてよかった。

パブで直接外国人と話すことができてうれしかった。

ハリー・ポッターの世界のようすばらしかった。

夜の Scottish Dance 教室がとても楽しかった。

自分の英語力のなさを痛感し、これでもっと勉強して頑張ろうと思った。

中でも最後の意見は多くの学生から寄せられたものですが、私たちが本来目的としている「英語を学ぶための動機付け」は充分達成できたと思います。今回のB.H.での異文化体験をもとに、今後一人一人が英語を学ぶ上で一層積極的に取り組み、やがて将来の夢につなげてくれることを期待して止みません。



英米文学の故郷

第6回 イェイツ・カントリー

英語・英語圏文化専攻 教員

伊藤 知子



ウィリアム・バトラー・イェイツ

ウィリアム・バトラー・イェイツ(William Butler Yeats, 1865-1939)は詩人、劇作家、そしてアイルランド文芸復興の指導者であり、ノーベル文学賞も受賞しました。アイルランドにおけるイェイツゆかりの地域としてはダブリン(Dublin)とその周辺、スライゴー(Sligo)とその周辺、ゴールウェイ(Galway)とその周辺が挙げられます。イェイツはダブリンのサンディマウント・アヴェニュー(Sandymount Avenue)にある赤煉瓦造りの家で生まれました。



スライゴー州の州都スライゴーはイェイツの母の実家の郷里であり、彼は少年時代からスライゴーに来て休暇を過ごすことが多く、詩作のインスピレーションをも得ました。スティーヴン・ストリート(Stephen Street)にある図書館はイェイツ関係の資料を集めた記念館にもなっています。イニシュフリー(Innisfree)はスライゴーの南東3キロにあるギル湖(Lough Gill)に浮かぶ小さな島です。有名な詩「湖の島イニシュフリー」("The Lake Isle of Innisfree," 1890)はロンドンにいたイェイツが望郷の思いを歌ったものです。私がアイルランドを訪れたのは2000年の8月でした。ギル湖畔から見たイニシュフリーの島は深い緑の木々に覆われていて、都会生活に疲れたイェイツがなつかしくこの島を思い出したことが納得できました。ドラムクリフ(Drumcliff)の教会の墓地にはイェイツの墓があり、その墓石には彼の詩「バルベン山のふもとにて」("Under Ben Bulbin," 1939)からの3行"Cast a cold Eye / On Life, on Death / Horseman, pass by!"が刻まれています。



イェイツの詩句を刻んだ墓

ゴールウェイ州のクール・パーク(Coole Park)はイェイツをはじめとするアイルランド文芸復興運動の芸術家達が集まった館があった所ですが、現在は森林公園になっています。

文学のみならず、音楽や映画を通して憧れを抱いていた「ケルトの世界」。イェイツの足跡を辿ってアイルランドを旅することによって、その一端を垣間見ることができました。

聖書の英語

英語・英語圏文化専攻 教員

浦野 洋司

狭い門からはいりなさい・Go in through the narrow gate!!

マタイによる福音書7章13節には"Go in through the narrow gate, because the gate to hell is wide and the road that leads to it is easy, and there are many who travel it. (狭い門から入りなさい。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからはいって行く者が多い)"ということばがあります。広い門がまず目に入り、広い道をたくさんの人が通ります。我々の多数決を原則とする民主主義、そして「みんなで渡れば怖くない」という感覚とはずいぶん違います。Narrow gateの教えは「多数」よりも「少数」、MajorなところよりもMinorな部分を重要視する見方といえます。主流よりも非主流に注目することでもあり、きらびやかなところよりも目立たない薄暗いところに目を向けることも知れません。

先日、フィリピンはマニラのゴミの山で生活している人たちのドキュメンタリー映画、『神の子ら』を見ました。貧しさと生活の厳しさの現実にショックを受けました。ドイツで高い評価を受け、その映画祭で大きな賞を受賞した作品です。フィリピン政府も誰も取り上げようとしなかったMinorの部分に目を向けた映画といえます。我々はときどき、大きなスポットライト、Majorな光に目が奪われて、その陰に隠れた小さな蛍の光のような宝を見ることが出来ません。

最近、「人道的」ということばをよく耳にします。Major なところに目を奪われなくて、Minor であっても、本当に必要としている人に目を向け、そこに近づいて行って配慮する。それが「人道的」ということではないかと思われまふ。聖書がいうこの「狭い門」は我々が本能的に避ける、貧しさや劣っていると考えるところに、小さいことに、実は宝のような真実の価値が隠れていることを教えているようです。

Living and Working in Paris

英語・英語圏文化専攻 教員

Patricia Yasuda

This time our interview is with Nobuko Miyacho who came to Caritas from Tsurumi Girls High School. After graduating from Caritas in 1998, she attended Liverpool Hope University in England and obtained a Bachelor of Arts degree in Information Technology and European Studies with Honours. She is now working in Paris for the OECD.

Q: Although you graduated from university in England, why did you decide to work in France?

A: I had already had some work experience in France when I graduated. I liked France and the people there and I knew many people. As I had stayed in England for four years, I did not really want to stay there for a career. I also wanted the challenge of living in another country.

Q: Could you tell us a little about your job?

A: I work in IT as a technical assistant at the OECD. I have developed some web interfaces for distributing statistical information from a database. I also prepare the publications and answer data inquiries.

Q: How did you find such an interesting job?

A: I wrote 150 manuscript "letters de motivation" and sent them all everywhere in France.

Q: How do you spend your free time in Paris?

A: I go out with my friends a lot. We often go to a park, go to the museums, have parties, go dancing, go shopping and go to the cinema.

Q: Recently, more and more students hope to learn both English and French, what advice can you give them?

A: I definitely recommend going to the countries to learn the languages. Don't be shy and don't worry about making any mistakes but be talkative! The fluency comes along as you talk.

Q: What was the most difficult thing to adjust to when you moved to France to work?

A: The French tend to talk quite directly and sarcastically. They tend to complain all the time and are very critical of everything.

Q: What is the most exciting thing about living in Paris?

A: The most exciting thing is to be able to have a good time without doing anything special. Being in Paris is the most exciting thing!

Q: Do you miss Japan?

A: Yes. I do miss Japan a lot. There are many Japanese restaurants so it is not a question of food but I still miss my friends, my family and being in Japan. It is so difficult to keep in touch with my friends and I tend to lose them.

先生が学生だった頃

このコーナーでは、カリタス女子短大の先生方がどのような学生時代を送ったのか、学生によるインタビュー形式でお届けします。第6回目のゲストは、英語・英語圏文化専攻の北川宣子先生です。インタビュアーは菅野陽子さんと御堂前美和さんです。



北川 宣子先生

Q1. 先生は色々な国で過ごされていたそうですが…。

3歳から8歳までミャンマーで過ごしました。(その頃は授業は英語で、友だちとはビルマ語でコミュニケーションをとっていました。)カリタス女子中学2年生の時にロサンゼルスに2年半、その後タンザニアの高校へと忙しい学校生活ではありましたが今ではとても貴重な体験ができたと思っています。

Q2. 先生の若さの秘訣は何ですか？

特別なことは何もしていません。強いて言えば、食べ物にもあらわれていますが、好き嫌いがはっきりしてマイペースな生活を送っている…ことでしょうか…？

Q3. 先生の趣味は何ですか？

今は、ガーデニングです。植木のお世話をしていると心が和みます。

Q4. 女性として大切なものとは何だと思われますか？

そうですね、やはり優しさと思いやりの気持ちを忘れないということだと思います。そうする事によって自然と内面の強さも養われると思います。また、女性ならではの良さも大事にしたいです。

Q5. 学生へのメッセージをお願いします。

成せば成るの信念でやり始めたら最後まで諦めずにやり抜いてほしいと思います。自分が想像している以上に秘めたる力があるかもしれませんよ…。

えいがのえいご

英語・英語圏文化専攻 教員

石塚 美佳



皆さんは昨年話題になった映画『ハリー・ポッターと賢者の石』(2001年)を見ましたか。今回はその映画の中から心に残る台詞を紹介します。次の台詞は映画の終盤、ハリー、ロン、ハーマイオニーの3人が「賢者の石」を守るために次から次へと魔法を解き、最後の砦である魔法界のチェスゲームに挑むシーンからのものです。ここでハリーを先に進ませるために、ロンは自分の身を危険にさらしてハリーを助けます。

[何が起きているのかというハーマイオニーの問いかけに対して]

Harry: He's going to sacrifice himself.

Hermione: No, you can't! There must be another way!!

Ron: Do you want to stop Snape from getting that stone or not?

Harry, it's you that has to go on, I know it. Not me, not Hermione. You!!

ハリー：彼は身代わりに。

ハーマイオニー：ダメよ！ほかに方法はないの？

ロン：スネイプに石を渡す気か？ハリー！君が先に進まなきゃいけない。

僕でも彼女でもなく 君だ！！

(訳：戸田奈津子)

で使われている助動詞 *must* には「～に違いない」という強い推量を表わす意味があり、“He's being late. He *must* have missed the bus.” (彼は遅れている。きっとバスに乗り遅れたに違いない。) というように使えます。 は強調構文で、*it* と *that* の間にはさまれている語(句)が強調されます。この場合、ロンは自分でもハーマイオニーでもなく、ハリーこそが先に進まない意味がないのだということを強調しているわけです。 *It's at that store that I bought this jacket.* (私がこのジャケットを買ったのは、[他の店ではなく]あの店です。) という形で使います。このシーンの後、気を失ったロンを傍らに、ハーマイオニーが “Heh, me? Books and cleverness. There are more important things. Friendship and bravery.” (わたしはただの“ガリ勉”優等生。もっと大切なのは 友情とそして勇気よ。) とハリーに言う場面がありますが、そのシーンもなかなか感動的です。

人気作家の作品を映像化すると賛否両論分かれることが多いですが、この映画は制作段階で 作者 J. K. Rowling 自身の意見をかなり参考にしたとのことで、映像と作品のイメージがぴったりだという意見が多いようです。この秋予定の第2作目の公開も待ち遠しいですね。

Kaleidoscope 第6号はいかがでしたか？ 皆さまのご意見・ご希望・ご質問など、お気づきの点を maeda@caritas.ac.jp までお寄せください。

2002年 7月10日発行

発行責任者： 北川宣子

編集協力&タイトル・ロゴ作成：

東京工科大学メディア学部 渡邊賢悟

カリタス女子短期大学

Caritas Junior College

〒225-0011

横浜市青葉区あざみ野 2-29-1

Tel:045-901-5133

Fax:045-901-5066

URL: <http://www.caritas.ac.jp/english>